

特集 課題山積みの東京オリンピック・パラリンピック —開催が歓迎される大会にするために

中野貞彦

南アメリカで初めて開催されたりオデジャネイロ・オリンピックは熱狂のうちに終了し、バトンを東京に渡した。参加国・地域の206という数は、国連加盟国数193を超える。選手は約1万人になる。今回、内戦などによる難民の選手団が結成された。南スーダン、シリア、コンゴ、エチオピアから10人が参加している。IOCバハハ会長は開会式のあいさつで、「全員が平等で人類愛を共有するという五輪の価値は、分断する力より強い」「連帯の精神に基づき、難民五輪チームを歓迎します」と述べ、五輪精神の原点が平和への希求にあることを強調した。

南太平洋の国フィジーは、7人制ラグビーで、かつての宗主国イギリスを破って金メダルを獲得した。多くの人が決勝戦観戦のために仕事や学校を休み、銀行も一時休業をしたという。首相は毎試合会場を訪れて応援し、国旗を掲げて祝う国民の姿を見て、英連邦を示すユニオンジャックをデザインしたフィジーの国旗の変更計画を中止したという（『図書』2016.10）。このようにオリンピックの金メダルは、国民的な快挙となるという面をもっている。

地元リオのファベラ（貧民街）出身のラファエラ・スルバ選手は、ロンドン五輪の時に侮辱の言葉を投げかけられたが、くじけずに努力を重ねて女子柔道で見事に金メダルを勝ち取った。そして彼女は人種差別や貧しさとの闘いをアピールした。ブラジルの子どもたちは、彼女の姿を見て大きな希望を芽生えさせているであろう。

メダルを取った選手はもちろん、参加した選手の競技にかける必死の姿に、多くの人が心を動かされた。選手一人ひとりにドラマがあり、オリン

ピックならではの華やかさも加わって、比類のないスポーツの祭典になったと言える。

リオ・パラリンピックは、159カ国・地域と難民チームが参加し、選手は約4300人。車いすラグビーのように激しい競技や、ボッチャのようなあまり動かない競技もあり、観る楽しさを味わい、選手の動きに感動を覚えた。パラリンピックもやはり素晴らしい。

オリンピックとパラリンピックの開催は、誰もがスポーツに親しむことができる社会を作っていく契機にならなければならない。そして、資金・設備・運営の面で、コンパクトでかつ適切なものでなければならない。しかし、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの準備にはあまりに多くの問題が吹き出している。

本特集は、国民が歓迎するオリンピック、パラリンピックにするための視点を示そうとしている。

石出法太氏と石出みどり氏は、近代オリンピックの始まりと理念からみて、商業主義の問題や選手のドーピング問題、政治との関係などオリンピックのかかえる課題を示している。

青沼寛之氏は、スポーツ基本法に照らして、安倍晋三政権がスポーツ振興を経済政策として進めていることを的確に批判している。

長田菜美子氏は、パラリンピック選手のスポーツを行う環境と実態を示し、一般の障害者のスポーツの権利に敷衍している。

萩原純一氏は、国立競技場問題、アスリートファーストの点から8月開催の問題、競技場選定問題など、「2020オリパラ都民の会」として運動・要求してきたことをわかりやすく示している。

（なかの・さだひこ：東京支部、前編集委員）